

「象徴的解釈」(Figurisme)と呼ぶ神話解釈から取り上げた。この解釈によれば古代民族の崇拜にユダヤ・キリスト教の唯一神や理神論的な最高存在が象徴されていたとする。これに対しド・ブロスは古代民族の崇拜は野生人と同じフェティシズムであり、唯一神ではなくこれこそが宗教の起源だと反論する。この崇拜は理念の抽象化のレベルの点で、いわゆる偶像崇拜よりも低級であり、それよりも古い崇拜である。この順序の重要性はフェティシズムとキリスト教の関係に置き換えると明白となる。神学者によれば確かにエジプト人は動物崇拜を行っていたが、その動物はあくまで真の崇拜対象(唯一神)の象徴にすぎない。キリスト教普遍史の順序では、真の崇拜対象(シニフィエ)のほうが物質対象(シニフィアン)に先行せねばならないからである。物質ではなく、はじめに言葉Ⅱ神があらねばならない(『ヨハネ福音書』)。

唯物論者ド・ブロスが批判するのは、唯一神を認識する抽象能力を要する崇拜から感覚的能力しか要しない物質的な崇拜があとから出現した、すなわちシニフィエがシニフィアンに先行したという見解である。この批判からは、唯一神へ至る神の觀念の抽象化の歴史(宗教史)を、人間の認識と言語の発展に依拠して論じる明確な態度が読み取れる。この態度はすでに『人間認識起源論』(二七四六)のコンディヤックが先鞭をつけていた。具体的個物から感官が受け取った個々の觀念の長い反省過程に由来する抽象觀念が歴史の原初から存在するはずはなく、これを論拠に両者共にデカルトの生得觀念論を否定する。個人における知識の習得過程の最終形態が抽象觀念だとする

このコンディヤックのロジックをド・ブロスの宗教史に適用すれば、人類史的な宗教進歩の最終形態は唯一神にあたり、その原初形態は具体的個物すなわちフェティシユとなる。ド・ブロスの創始したフェティシズムとは、シニフィアンとシニフィエの分裂以前の存在への崇拜であり、この点においてはじめて「神即モノ」の直接関係を開示しうる信仰形態を示すために創始された、非常に戦略的な論理仮説であった。だがシニフィアンとシニフィエが必然的に結合するような状態など想定できるだろうか? ド・ブロスが『言語形成論』で懸命に証明しようとした論点こそ、実はこの言語の恣意性の否定であったのである。その意味で『フェティシユ神』は言語起源の論理を宗教史に応用した一つの例証だったといえる。

デュルケームとモースの「隠された共同作業」 —— 供犠論の生成 ——

山崎 亮

『社会学年報』において中心的な位置を占めていた宗教研究は、周知のように、デュルケーム、ユベール、モース、エルツらの緊密な共同作業に依拠していた。デュルケームにせよモースにせよ、その宗教研究を十全に理解するためには、このような共同作業の内実、さらには社会学年報学派の宗教研究全体への目配りが欠かせないはずだが、従来の研究ではこのような視

第1部会

点はあまり顧みられてこなかった。本発表では、彼らの共同作業のなかでも、論文や書評などの共著という形で直接表面に現われない「隠された共同作業」の典型例として、一八九九年の『社会学年報』第二巻に掲載されたユベールとモース「供儀の本質と機能に関する試論」（以下、「供儀論」と略記）を取り上げ、その「困難で混沌とした」生成におけるデュルケームの関与の内実を検討する。

「供儀論」では、ロバートソン・スミスによる起源論的な供儀理解が批判され、入場・いけにえの殺害・退場という供儀の図式、ならびに聖と俗との媒介としてのいけにえという概念の導入によって、供儀の総体的・動態的な説明が可能となった。さらに結論部分では、内在と超越という両義的な社会観と供儀による社会活性化の機能が提示されている。これは、同じ『社会学年報』第二巻に掲載されたデュルケームによる「序文」と「宗教現象の定義について」（以下、「定義」論文と略記）に見られる発生論的観点——宗教はすべての社会制度の胚珠であり、それらの制度の成立を理解するために「原始的」な宗教の研究が必要となる——ならびに強圧的な社会観とは対極をなしていた。

ユベールとモースの実質上の処女作である「供儀論」は、デュルケームがロバートソン・スミスに淵源する発生論的観点からその執筆を促したものであり、一八九七年後半に始まるその構想の初期段階から、彼は二人の共同作業にパターナリスティックに介入していた。しかし、三つどもえの共同作業が進行する過程で、デュルケームは供儀の生命維持機能を社会に適用す

る発想に導かれる。それは供儀に社会活性化の機能を認めることであり、それまでのデュルケームの発生論的観点、強圧的な社会観に根本的な修正を迫る発見であった。原稿執筆の遅滞に苦しむモースに援助の手をさしのべたデュルケームは、「供儀論」の結論部分に、この新たな発見を直接反映させる。「序文」と「定義」論文では、従来からの強圧的社会観と発生論的観点を維持しつつ、みずからの名前を冠さない「供儀論」のなかに、新たに萌した社会観と宗教観とをいわば実験的に滑り込ませたのである。事実、「供儀論」以降、デュルケームの宗教研究の出発点であった発生論的観点は影を潜め、両義的社会観と儀礼の社会活性化機能の探求が彼の宗教研究の中心テーマとなつて、それは一九一二年の『宗教生活の基本形態』へと結実していくのである。

他方で、「供儀論」に見られた共時的観点と宗教現象の総体的把握の視点は、その後の社会学年報学派による宗教研究の共有財産となつていく。『社会学年報』第五巻（一九〇二年）のアナリイズの宗教社会学セクションの序文において、ユベールとモースは、宗教研究の新たな枠組みとして、表象と実践と社会組織、それらを包摂する宗教体系という四つのカテゴリーを提示するが、それはまさに「供儀論」における共時的かつ総体的観点の延長線上に到達されたものであった。もとより、デュルケームの『宗教生活の基本形態』もまた、基本的にはこの枠組みに準拠する作品だったと見ることができるといえる。

このように、「供儀論」の「困難で混沌とした」生成の過程は、デュルケームの宗教研究の転回点をなすものであると同時に